

悲哀と飽食

正月の能登半島を急襲した震度7。惨禍の回復はまだ遠い。「今回の地震で目を見張るのが、倒壊家屋の多さ」(20日夕刊)。犠牲者を捜す姿が涙をこぼす。

帰省した妻の実家で妻子四人を失った公務員、「私が町長だったら」といってテーマの作文コンクールで優秀賞を得た友を悼み石川県能登町の中学生が「仲間に黙とう」(23日朝刊)。その写真が哀しい。さらに悲惨なのは焼け落ちた輪島の朝市通り。家屋の下敷きになり、炎に包まれた両親を捜す手がかりが「実家から人骨 DNA鑑定」(24日朝刊)。嗚咽が聞こえる被災地の一部で先週末からボランティアによる廃材などの片づけが始まった。

被災地の悲しみは永田町には届かないようだ。裏金問題で自民党は四分五裂の様相。混乱のまま国会論戦が始まった。裏金は安倍派だけで約6億7千万円。あきれたのは幹部たちが異口同音に秘書や事務所の責任にする姿だ。罪の意識のかけらも感じられない。国民にはマイナカード、事業者にはインボイス制を強いていながら議員諸公は堂々の脱税ではないか。派閥の解消など国民には何の説得力もない。本紙は「政策集団として存続を認める限り、派閥政治の実態は変わるまい」(25日社説)と半ば諦観の様子。国会の集中審議では野党の舌鋒もいまひとつ。首相は人工知能(AI)の自動音声のように同じ答弁を繰り返していた。

折しもあの痛ましい「京アニ」放火事件に判決。「責任能力認定」(26日朝刊)がポイントだった。国会でもまず安倍派幹部と裏金議員の「責任能力認定」をしてはどうか。無責任議員をあぶり出し、その政治生命に判決を下すのは有権者だ。下村博文、塩谷立、松野博一、萩生田光一氏はいずれも文部科学大臣経験者で暗然たる気分になる。どんな顔で教育や道徳を問ってきたのか。

被災地で歯をくいしばって生活再建に立ち上がる人々、永田町で数千万円の裏金で贅沢さんまの議員たち。この悲哀と飽食の落差が政治の劣化を物語っている。それを糾すのが私たちが有権者の義務であろう。

(静岡文化芸術大学名誉教授)

2024年2月4日

中日新聞(朝刊) p.7